

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成20年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 古典力と対話力を核とする人文学教育
機関名	: 神戸大学
主たる研究科・専攻等	: 人文学研究科・文化構造専攻[博士前期課程][博士後期課程]
取組代表者名	: 佐々木 衛
キーワード	: 基盤的素養としての古典力の開発、学術的な対話力の醸成、人文学の学術的融合、市民へのアウトリーチ

I. 研究科・専攻の概要・目的

本研究科は、神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）と同大学院文学研究科（修士課程）とを統合して、平成19年4月に改組された。現在は**文化構造と社会動態の二つの専攻と、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化論の五つのコースから構成**されており、教員数は、教授26名、准教授31名、講師4名、助教2名の合計63名、在籍学生数は、博士前期課程115名、博士後期課程108名である（平成22年5月1日現在）。

本研究科の目的は、人類がこれまで蓄積してきた人間及び社会に関する古典的な文献の原理論的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する教育研究を行うことにある。各専攻の概要・目的は以下の通りである。

1) **文化構造専攻：前期課程**においては、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成することを目的とし、**後期課程**においては、人文学の高度な研究法を継承しつつ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成することを目的とする。

2) **社会動態専攻**：フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する教育研究を行うとともに、**前期課程**においては、社会文化の動態的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成することを目的とし、**後期課程**においては、社会文化の高度な動態的分析能力を備え、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成することを目的とする。

また、本研究科では、上記の理念に沿って、課程において身に付けさせる知識技能として、以下の5つを設定している。

- 1) 古典に関する知識と現代社会の諸問題に対する哲学的・倫理学的分析技能
- 2) 文学テキストや古典に関する知識とその読解力、語学力
- 3) 歴史文献資料に関する知識とその読解力、フィールドワークによる実証的分析技能
- 4) 人間の心理、言語、感性についての科学的知識と実証のための実験技能
- 5) 現代社会や文化についての知識と調査技能、社会的価値規範の形成に寄与するための基礎的知識とフィールドワークの組織化に関する技能

教育においては、平成20年度に、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP) 「東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム」に、平成22年度に「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」にそれぞれ採択され、フィールドワークや論文執筆、国際学会発表、公開講座や市民フォーラムの開催等、様々な教育研究活動の場となる「国際連携プラットフォーム」を構築し、東アジアの未来を担う、高度な研究能力と広い国際的視野を持った若手人文学研究者等の育成を目指している。

研究においては、平成21年度に科学研究補助金基盤研究 (S) 「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」に採択され、研究プロジェクトに学生が参加することで教育効果を高めるなど、教育においても活発な活動を推進してきている。

Ⅱ. 教育プログラムの目的・特色

1. 養成される人材像

本プログラムは、人文学を現代的に深化させ、現実的諸課題に対応しつつ、**学域を横断して**発展させるための**基盤的素養としての「古典力」**の涵養を図る。また、この基盤の上に、異なる領域の専門家や市民と意思疎通し、人文学の**学術的融合**を推進できる、**幅広い「対話力」**を兼ね備えた人材養成を目的とする。

前期課程では、専門応用能力や、学域横断的な研究交流を行う意思疎通の力を持った、ジャーナリストや専修免許教員などを養成する。また、後期課程では、研究者として自立して研究活動を行いうる高度の研究能力を身に付けさせる観点から、次のような人材を養成する。すなわち、1)新しい研究対象や方法を開発しうる研究者、2)一般教養教育などの場で多様な学生に対応できる大学教員、3)地域の多様な文化的ニーズに応えうる高度な学芸員などの専門家といった、**異なる専門を理解し融合する能力を持つ人文学研究者・高度な専門職業人**である。

2. 期待された成果

本研究科は、**人文学の原理的研究とフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析**を通じ、文化的現象の現代的意味を問うことのできる人材、あるいは新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する人材を養成することを目的としている。そのために高次の専門性と総合性とを兼ね備え、現代的課題に対応できる能力の強化を目指し、**人文学分野の共通科目の開発と実施**を行ってきた。特に、本研究科固有の共同研究組織、海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育インスティテュートが提供する、**人文学の原理的研究を基盤にした学域横断的共通科目**では、海外連携大学を含む学内外の多様なネットワーク及び神戸の海港都市としての文化的歴史的特性を活かした多彩なフィールドワークによって多くの実績を挙げた。

上記の目標をより高い次元で達成するため、本プログラムでは、「**人文学フュージョンプログラム**」を構築する。**前期課程の「融合人文学基盤科目群」**では、学生の人文学研究発展の基盤となる学域横断的な「**古典力**」と「**対話力**」の育成に重点を置く。学生は、そこで培われた能力を、修士論文の執筆に活かすと同時に、教員や博物館学芸員、ジャーナリストなどの社会の幅広い職域で発揮することができることが期待された。

また、**後期課程の「融合人文学発展科目群」**では、「古典力」を更に発展させつつ、学域横断的に学生が意思疎通できるより進んだ「**対話力**」、人文学の現状や成果を学生が市民に表現する伝達・企画運営能力としての「**アウトリーチ**」の力、及び共同研究を企画運営しながら、学生が**人文学分野の新たな研究対象・方法・理論を開発する**に至る、**高度な「学術的対話力」の醸成**が期待された。

3. 独創的な点

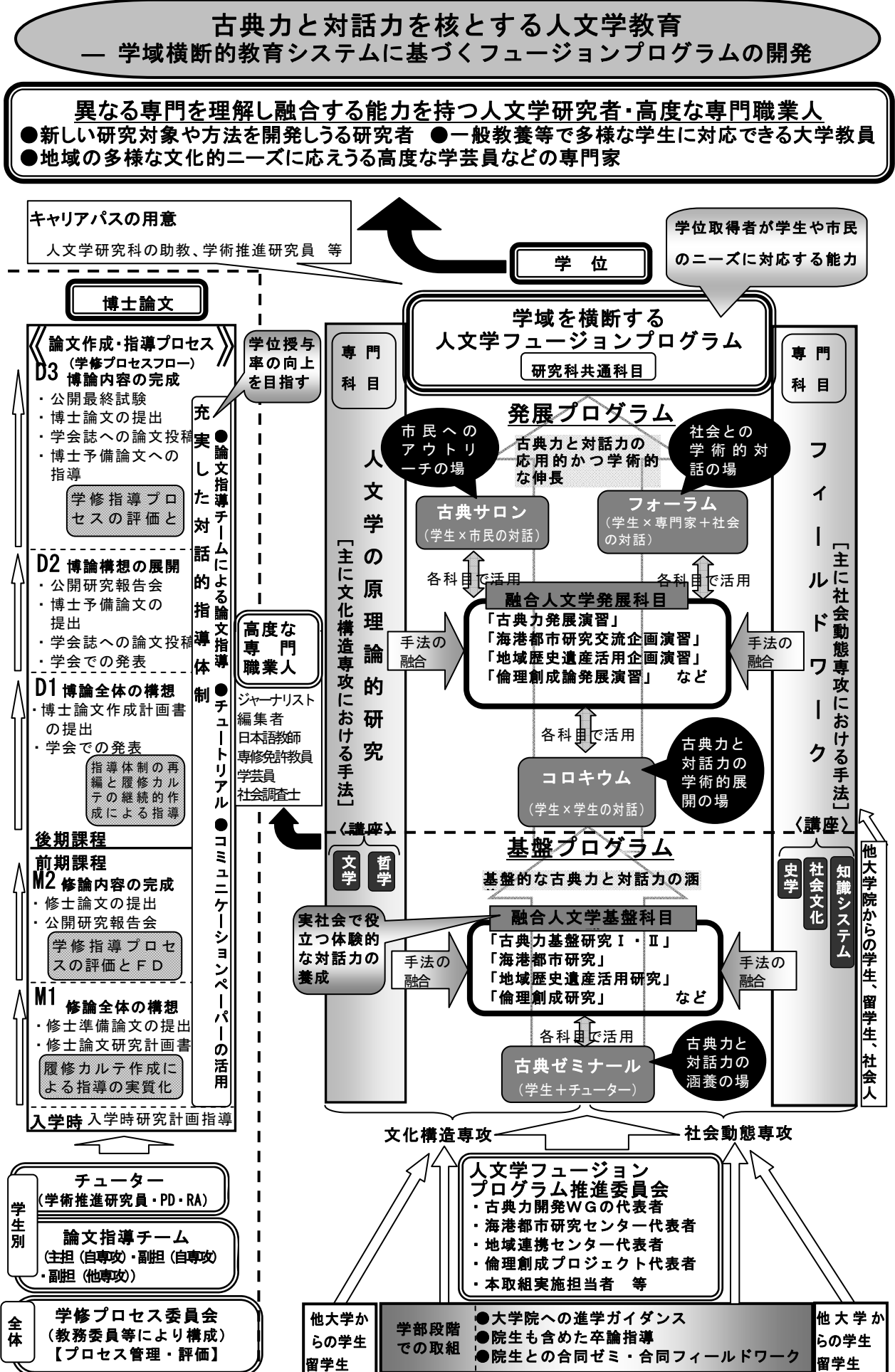
本プログラムは本研究科の実績を継承・発展し、特に「魅力ある大学院教育」イニシアティブ等に採択され、高い評価を受けている研究科の共同組織(海港都市研究センター等)の教育成果を基盤にして、研究科共通科目を再編し、充実させるものである。例えば、「海港都市研究交流企画演習」では、研究分野を異にする学生が、特定の主題を相互に理解できるように表現する力を磨く発表準備会を開き、連携大学でのコロキウム報告集を日・中・韓等の多言語で留学生と共同制作する。これを踏まえて本プログラムでは、「**コロキウム**」として多言語による報告を行い、その成果を出版するという一連の教育プロセスが確立されている。**本プログラムは、このような先進的な実践を踏まえ、人文学研究科が一体となって融合的教育プログラムを開発することで、我が国の他に類を見ない人文学の大学院教育のモデルを提示することができる。**

また、これらの取組みにより、学生の企画運営能力や組織力、意思疎通の力をより向上させ、社会的に要請されている実践的な応用力を養成するプログラムとして発展させることが、本プログラムの独創的な点である。

Ⅲ. 教育プログラムの実施計画の概要

本プログラムの履修プロセスは次ページの図1の通りである。

図1：履修プロセスの概念図



本研究科では、人文学の原理論的研究とフィールドワークの二つの教育研究手法を融合し、学域横断的な能力を養成する「**人文学フュージョンプログラム**」による大学院の共通科目群を設置し、学生に履修を義務付けている。それに加えて、本プログラムは、古典力と対話力の獲得と実践の場として「**古典ゼミナール**」、「**古典サロン**」、「**コロキウム**」、「**フォーラム**」を活用した共通科目を段階的に実施することで、大学院教育を実質化し、現代の社会的ニーズに応えうる知識と技能を身に付けさせる。

博士前期課程においては、人文学を現代的に深化させ、学域横断的に発展させるための基盤的素養である「**古典力**」と、それを活かすための「**対話力**」を修得させる「**基盤プログラム**」を設ける。「**古典力基盤研究**」では古典力・対話力涵養の場としての「**古典ゼミナール**」を活用しつつ、古典分析能力及びそれに裏打ちされた現代的古典の素養を修得させる。「**海港都市研究**」、「**地域歴史遺産活用研究**」では、地域的課題を国際的視野と結び付け、現代社会の調査研究を行う能力や地域遺産を活用する能力を養成する。「**倫理創成論研究**」では、科学技術やグローバル化が生み出す課題の解決に倫理的側面から貢献する能力を養成する。共通科目の履修を通じて得た総合的な知見を活用し、質の高い修士論文を完成させると同時に、それを学芸員などの高度な専門的職業で活かす能力を培う。

博士後期課程においては、「**古典力**」と「**対話力**」を学術的かつ応用的に発展させ、人文学に対する多様なニーズに対応する能力を身に付けさせる「**発展プログラム**」を設ける。学生が研究者や市民と対話する場としての「**コロキウム**」、「**古典サロン**」、「**フォーラム**」及び海港都市研究・地域連携・倫理創成の学域横断的な研究プロジェクトを活用し、「**古典力発展演習**」、「**海港都市研究交流企画演習**」など、学生が主体となって企画運営する演習を実施する。共通科目の履修を通して獲得された洞察や課題を人文学研究のフロンティアを拓く、先端的内容を持った博士論文として結実させる、と同時に、専門家以外の人々に対するアウトリーチと教育能力を養う。

IV. 教育プログラムの実施結果

1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

(1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

本プログラムの課題は、最終的には大学院生が、人文学の素養を活かして、異なる専門を理解し融合する能力を持った、研究者や高度な専門職業人となることにある。実施の方針は以下の通りである。

■平成 17・18 年度の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」「国際交流と地域連携を結合した人文学教育―海港都市を教育フィールドとして―」による国際性とフィールドワークの能力の向上を図る、大学院共通科目のカリキュラムと成果を引き継ぐ。

■上記「イニシアティブ」に加え、人文学研究科共同研究組織の開発した、社会的課題に取り組むことのできる能力と学際性を修得させるカリキュラムと成果を発展させる。

■問題を原理論的に考察する能力および学域横断的に人文学の共通課題を理解する基盤的素養としての「**古典力**」を養成する。

■社会的現実を切実に知る能力、および他の学域や社会と意思疎通できる高度な学術的能力としての「**対話力**」を養成する。

- ・「**古典力**」と「**対話力**」の養成のために「**人文学フュージョンプログラム**」を開発する。具体的には以下のような取組みが中心となる。新たに博士課程前期大学院生が対象の「**古典力基盤研究**」と博士課程後期大学院生が対象の「**古典力発展演習**」とを開講し、大学院共通科目のカリキュラム整備を行う。と同時に、これらの共通科目と連動し大学院生が研究活動を行う場を組織し、支援する。
- ・人文学研究科の複数研究分野の大学院生が集う自主的勉強会・読書会としての「**古典ゼミナール**」の支援。
- ・大学院生が主体となって、国内外の他大学の大学院生や研究者と行う「**フォーラム**」「**コロキウム**」

の開催の支援。

- ・大学院生がその研究成果を市民にアウトリーチする「古典サロン」の開催。

■学修プロセスの一環としてきめ細やかな指導を実施する。

- ・他大学からの入学者、留学生のフォローアップ、あるいはより専門性の高い大学院生のために外部の研究者に依頼する「チュートリアル」の実施。
- ・「古典力発展演習」などで、大学院生の発表の能力を向上させるために相互に意見を出し合うことで、その改善を図る「コミュニケーションペーパー」の利用。

■フュージョンプログラムが、円滑に推進されるように、事業全般を動かし、大学院生の活動を支援する目的で、特命助教 1 名を若手研究者室に常駐させる。また、PD から選考された、学術推進研究員数名、大学院生から選考された学生支援員数名がこれを補助する。

①授業科目の実施状況

本プログラムで「**古典力基盤研究**」と「**古典力発展演習**」という二つの授業科目を開発し実施した。それぞれ 21 年度から試行的に開講しており、この二年間の実施状況を踏まえ、23 年度から正式科目として開講するに至った。「**古典力基盤研究**」では、**人文学共通の課題を理解する基盤的素養を養うため、設定したテーマに沿ってさまざまな専門分野の教員による集中講義をオムニバス形式で行なった**。各日ごとにサブテーマを設定し、1 日 3 人の教員がそのサブテーマに沿って講義した。テーマ設定に関しては人文学研究科内の多くの専門分野の教員が関わられるように工夫することで幅広い学生が参加できるようにした。一方、授業が一つのテーマについての探求であることを学生たちに理解してもらうために、1 日の授業の最終時限に、その日登壇した教員全員が集まって、学生と質疑応答を行ない、討論をするという時間を設けた。また、最終日に全体の授業を振り返る形で「フォーラム」を開催し、受講学生以外にも参加可能とした。また各日のディスカサントをテーマに近い古典ゼミナールに依頼することで討論の質を高めることができた。**このように細かな配慮がなされた上で、人文学研究科の多彩な講師陣と本プログラムの特質を生かす授業は他に類を見ないものである。**

「**古典力発展演習**」では**プレゼン技術向上のために、プレゼンに関する技術指導を行なうとともに、学生がプレゼンの練習を繰り返し行なう機会を設けた**。アナウンサー学校の講師から発声法やプレゼンの際の注意点などについてレクチャーを受け、その講師の前で実際に学生が発表をし、プレゼンについての直接指導を受けた。また、プレゼンテーションソフトの使用法や動画の編集方法に関するレクチャーも行なった。そうした指導のもと、繰り返し発表経験を積んだことにより、学生たちはプレゼンに対する自信が付き、最終回のプレゼンでは当初に比べて見違えるほど上達した。**本授業では単にプレゼンの練習をするだけでなく、「コロキウム」や「古典サロン」といった実際に発表する場も提供することで、実際の発表を意識しながら練習することができた点も効果的であった。アウトプットの間を本取組みの中で提供できたことは、各取組みが有機的に連携し、機能していることの証である。**また「**コミュニケーションペーパー**」も大きな役割を果たした。これは聴衆である教員や学生が発表者に対するコメントを書くためのものであり、授業後、発表者宛のすべての「**コミュニケーションペーパー**」を集めて発表者に渡した。授業内ではコメントをすることができない学生の意見も拾うことができ、また、文字通り受講者内の円滑なコミュニケーションにもつながった。さらに、**他の人の発表にコメントすること自体が自分の発表を客観的に見ることにつながり、プレゼン技術向上につながった**という点もあった。こうした成果のもと、この「**コミュニケーションペーパー**」は他の大学院共通科目でも導入が決まった。

これらの授業科目開発は、人文学研究科内の 4 センターの各担当者を含めたフュージョンプログラム推進委員会で行なわれた。その中で、各センターが開設している「**地域遺産活用企画演習**」、「**海港市研究交流企画演習**」、「**倫理創成論発展演習**」、「**日本語発展演習**」などの授業科目での経験を生かすことができ、また、本プログラムの授業科目「**古典力基盤研究**」や「**古典力発展演習**」での成果をそれぞれのセンター開設科目に生かすことができた。具体的には「**古典力発展演習**」で用いた「**コミ**

コミュニケーションペーパー」を「海港都市研究交流企画演習」が導入し、「古典力基盤研究」の授業形式を「倫理創成論研究」が導入したことなどが挙げられる。



図2「古典力基盤研究」の授業風景



図3「古典力発展演習」の授業風景

② 4つの場の実施状況（次ページの表1を参照）

学生の自主的な勉強会、読書会の場合である「**古典ゼミナール**」は、複数の専攻の学生が参加しているということを条件に20年度から募集し、22年度当初には14の古典ゼミナールが立ち上がった。書籍代や研究会開催経費を支援し、研究の活性化を図った。さらに各古典ゼミナール間の交流を促すことで「合同古典ゼミナール」などが開催され、学際的な研究へとつなげることができた。23年度からは新たに立ち上がった4つのゼミを含め、13のゼミが開かれることからわかるように、「古典ゼミナール」は本研究科に定着したといえる。

大学院生たちに、人文学研究のホットトピックに触れてもらう機会を増やすために、専門家を招いた講演会、研究会の場合である「**フォーラム**」をこれまで33回開催した。「フォーラム」の特徴は、**学生が発表者や特定質問者など、何らかの形で積極的に参加**しているという点である。それにより、事前の勉強会や打ち合わせなどが学生たちにより自主的に行なわれ、テーマに関する理解が深まった。22年度からは「古典ゼミナール」から「フォーラム」の企画を募り、研究員のサポートを受けながらフォーラムを開催することで、学生の自主性を養うとともに「フォーラム」が「古典ゼミナール」内での研究をサポートする機会として機能した。

学生の発表機会を増やすために、主に海外連携大学と合同で開催してきた「**コロキウム**」では、学内外の学生が集い発表するミニ学会のようなもので、これまで18回開催してきた。多くのコロキウムが英語での発表を義務づけており、この**コロキウムでの発表をステップに海外留学生が増えた**ことは大きな成果である。本取組みの中で開催した、海外大学と連携したコロキウムのすべてが今後も継続的に開催され、特に、海港都市研究センターが開催している「海港都市国際学術シンポジウム」や倫理創成プロジェクトが主体となって開催している“**International Conference: Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia**”はそれぞれのセンターが中心となって今後も継続していく。また本研究科の大学院生や若手研究者らが、学外の若手研究者らとともに、近代教育史をテーマとし、日本史、西洋史、東洋史という従来の専門分野の枠組を超えて議論を深めることを目的として開催された「**教育コロキウム**」は21年度から開催しているが、このコロキウムの参加メンバーが主体となり、「**教育史学会**」の企画コロキウム部会への参加を予定しており、すでに数回の企画会議を行なっている。これらはまさに本取組みが若手研究者同士のプラットフォームとして機能した事例であるといえよう。

学生がこれまでの研究を市民にアウトリーチし、同時に市民が大学と接点をもてる場として「**古典サロン**」を行なってきた。これまで6回開催し、学生、市民ともにとても好評であった。学生を「講

表 1 〈4つの場〉関連実施状況一覧

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	
シンポジウム	人文学における対話の重要性—古典と現代社会—	人文学における古典と対話	総括シンポジウム	
古典ゼミナール	ジェンダー論研究会	ジェンダー論研究会	ジェンダー論研究会	
	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会	
	アジア海域史研究会	アジア海域史研究会	アジア海域史研究会	
	リスク論研究会	リスク論研究会	リスク論研究会	
	アリストテレス研究会	アリストテレス研究会	ギリシア語原典講読研究会	
	兵庫津・神戸研究会	兵庫津・神戸研究会	兵庫津・神戸研究会	
	マックス・ウェーバー研究会	日本語動詞研究会	日本語動詞研究会	
	日本語動詞研究会	映像と諸文化研究会	映像と諸文化研究会	
	映像と諸文化研究会	「他者と欲望」をめぐる現代思想研究会	「他者と欲望」をめぐる現代思想研究会	
		フランス現代思想研究会	フランス現代思想研究会	フランス現代思想研究会
		現代社会論研究会	現代社会論研究会	現代社会論研究会
		感性を巡る思想研究会	感性を巡る思想研究会	感性を巡る思想研究会
		古典と美術史研究会	古典と美術史研究会	古典と美術史研究会
		「西洋人の見た」中国研究会		
フォーラム	ノン・アスベスト社会のために(V)—リスク・コミュニケーションの課題と実践	脚韻に理由あり	揺れる法廷？ —裁判員制度における〈判定〉	
	ヨーロッパにおける〈マンガ〉と〈日本〉	日系三世映画監督&アーティスト リンダ・オオハマが語る日系カナダ 人体験	トラウマを語ること/語らないことと支援者の 役割—ノンアスベスト社会のために(VI)	
	バイオエシックスとカント	日本語日本文化教育インスティテ ュート設立記念 講演シリーズ	公共人文学としての文学 (Literature as Public Humanities)	
	自治体合併後の地域遺産の保全・ 活用をめぐる現状と課題	アメリカにおけるフェミニスト思想 の現在	モダニティーの多元性: 中国台頭の背景—い かに富強から文明に向かうのか—	
	アリストテレス哲学としての「詩学」	バイオエシックスの諸相 —原理と実践	英語論文執筆の技法—若手研究者のため のアカデミックライティング—	
	カント感性論の現在形	アジアにおける文化的記憶	TV ゲームの感性的論理 —ニューメディアと文化—	
	社会学的対話とコミュニケーション	モダニティーの多元性—東アジ アの「伝統社会」から考える	日本のマイノリティと人文学研究	
	ジェンダーの可能性を考える	カントと人文学	モダニティーの多元性 —戦争・漫画・ジェンダー	

	日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究—	震災から15年—地域歴史資料の現在	イメージを通じた日中共生文化プログラム
		人文学における古典と対話	〈美的＝感性的〉人間の誕生—ライブニッツからバウムガルテンまで—
		西田哲学の現在	公害被害の歴史と現在—語り継ぎと学際的研究—
			神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報『LINK』第2号書評会 地域歴史文化を担う人材像を考える
コロキウム	長谷川理論のレガシー	日本研究における次世代研究者たちの出会いの場	美学とジェンダー—キャロリン・コースマイヤー『美学—ジェンダーの視点から』書評会
	資料収集・研究交流会	東アジアにおける比較市民社会論	1st International Conference: Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia
	モダニティーの多元性—東アジアの視点から	水俣病をめぐる研究交流会	第3回若手人文学研究者の出会いの場
	応用倫理学の課題	近代アジアにおける教育	教育のポリシーとポリティクス—近代中国、オスマン帝国、フランスにおける教育と政治
		第5回海港都市国際学術シンポジウム「越境する人々とナショナリズム」	第6回海港都市国際学術シンポジウム—東アジア海港都市文化の発展—越境ネットワークと社会変遷
		資料収集・研究交流会	第4回若手人文学研究者の出会いの場
			「古典ゼミ☆コロキウム」 資料収集・研究交流会
	古典サロン	生野銀山古文書合宿	移情閣で孫文「大アジア主義」講演を読む
		場との交流—いま・ここで生まれる何かを求めて	生野銀山古文書合宿
		生野銀山古文書合宿	
古典カフェ		古典カフェ(古典ゼミ紹介)	古典カフェII(古典ゼミ紹介)
			レジュメのつくりかた
			異文化交流—留学生写真展示会:神戸で出会い、世界にはばたけ

師役」として据えることで市民にも気軽に参加できる場となり、また、学生にとっては社会と研究との接点を見いだす機会にもなった。22年度からこの「講師役」には「古典力発展演習」でプレゼン技能の高い学生に依頼することにした。それにより「古典力発展演習」と「古典サロン」が今後も持続可能な形で効率的に開催できるようになった。

これらの「4つの場」と開設した授業科目とが様々な形で連携し合いながら大学院生たちに教育の機会を提供することができたことは本プログラムの大きな成果である。



図4 コロキウム「教育のポリシーとポリティクス」



図5 古典ゼミナール「アリストテレス研究会」



図6 フォーラム「英語論文執筆の技法」



図7 古典サロン「正統性のまぼろしを追いかけて」

③ 大学院生への研究支援（チュートリアルなども）

これまで本プログラム実施期間中の3年間で、学生研究支援員という形で大学院生をのべ27人、学術推進研究員という形でPDをのべ35人雇用し、研究支援を行なってきた。

人文学研究科の大学院生を対象に20年度から「チュートリアル」を実施している。これは博士後期課程の学生あるいは外部講師による個別指導であり、**20年度に4件、21年度に12件、22年度に4件実施し大学院生の研究や論文作成を支援**した。これにより、授業科目や4つの場ではフォローしきれない部分をサポートし、修業年限内での論文作成を支援した。また、様々な形で学生からのニーズを吸い上げ、本取組みの枠内で支援してきた。たとえば、「アカデミックライティング」についての講習会や、「レジュメの作り方」についての講義指導を「フォーラム」や「古典カフェ」において行なったのはその一例である。

④ 若手研究者室の活動状況

本プログラムを効率的に推進するにあたり、人文学研究科C棟1階の「若手研究者室」を利用し、10台のデスクと資料スペース、会議スペースなどを配置した。特命助教が総合管理者として常駐した。本プログラムに従事する学術推進研究員や学生支援員、学生らが交流や学術的な意見交換を行う場、プログラム関連教員が会議を開く場、各種連携プロジェクトが企画・運営会議を行う場など、多様な用途を実現するスペースとして機能させた。

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により期待された成果が得られたか

人文学研究科は平成19年度に文化科学研究科から改組されて以降、標準年限内で博士の学位を取得する学生数が3倍程度にまで飛躍的に増加したため、各年度の総在籍学生数は減少している。また、特に博士後期課程の学生は3年次12月までに博士学位論文を提出しなければならないため、学位論文作成に多くの時間を割かなくてはならない。そのため、平成19年度と比べると平成20年度の学会発表数、論文発表数は減少している。しかし、平成21年度以降は増加に転じ、博士前・後期課程合わせて、平成22年度の学会発表数は104回、論文発表数は76本となっており、プログラム開始年度（平成20年度）の数値（学会発表63回、論文発表51本）と比べると増加は著しい。とりわけ、国外学会での発表数が平成19年度の11回から平成22年度の26回へと増加しており、学生に多様な研究発表の場を与える本プログラムの取組みが実を結んだものと考えられる。博士前期課程の学会発表数（平成19年度の11回から平成22年度の30回）、論文発表数（平成19年度の5本から平成22年度の13本）も顕著に増加している。改組によって博士後期課程在籍の学生に対する博士学位論文執筆の圧力が強まった状況を考慮すれば、**学生の学会発表・論文発表は全体として活発であり、多くの業績をあげている**と言える。このことは、**本事業が効果を上げている結果である**と考えられる。

さらに、**海外の大学で学ぶ学生の数も、平成19年度は6名であったが、年度を経るごとに順調に増加し、平成22年度は25名となっている。**

標準修業年限内の学位取得率に関しては、博士前期課程においては、昨今の就職状況の悪化の影響もあり、変動は見られない。しかし、**博士後期課程における標準修業年限内での学位取得率が平成19年度の12%から平成22年度は36%へと上昇した。**このことも本プログラムの成果のひとつであると考えられる。

就職状況については、博士前期課程では、後期課程への進学者数と就職者数の合計の占める割合が、平成19年度は74%、平成22年度は79%であり、一定の数値を維持している。**博士後期課程では、大学教員あるいは公的な研究機関でポスドクなどの研究員の職に就く者の割合がプログラム実施期間を通じて約70%と安定しており、研究職への就職が困難な現状においても継続して人材を育成することができている。**こうしたデータは、本プログラムによって学生が高度な研究能力と対話能力を身に付けた結果の現れであると考えられる。

定量的なデータに現れにくい顕著な成果としては、以下の3点を挙げることができる。

1)**学生の研究企画運営能力の向上。**教員が企画運営する従来型の研究会とは異なり、本プログラムでは、古典ゼミナールなどと連携して、学生が主体となって研究会を企画することが推奨された。その結果、実施期間中に学生主体のフォーラム「TVゲームの感性的論理」「日本のマイノリティと人文学研究」「<美的=感性的>人間の誕生」など、専門性と学際性が発揮された研究会が開催された。研究会の企画に際しては、学生は研究会開催の趣旨・目的や予算規模などを記載した企画書を作成することが求められたが、こうした経験を大学院生の時期に積むことは、これから研究者として活躍するために有益であると考えられる。

2)**研究成果を発信する能力の向上。**本プログラム開講科目の「古典力発展演習」においては、プレゼンテーション能力の向上を目指し、アナウンス学校から講師を招くなどして、受講学生は高度かつ専門的なプレゼンテーション技術を習得することができた。さらに、一般市民に研究内容をわかりやすく伝えることを目的とした古典サロンでは、通常の学会とは異なる能力を発揮することが求められるが、学生はこれに主体的に取り組む、出席者からも好評を博することができた。こうして、今後自身の研究を一般社会に向けて発信する際に重要となる、アウトリーチの能力を培うことができた。

3)**教育研究分野間の交流の活性化。**結果として、内部進学者・他大学からの進学者を問わず、学生は教育研究分野の垣根を取り払い、意見交換を頻繁に行うことで、研究の幅を広げることができた。本研究科は博士前期課程入学者のうち40パーセント程度が他大学出身者である。そのため、他大学からの進学者はゼロから人脈・交流を構築しながら研究を行う必要があるが、本プログラムが学域横断的な古典ゼミナールやフォーラムなど、教育研究分野を跨いで学生や教員が日常的に交流する機会を

作った結果、他大学からの進学者も内部進学者同様の環境で研究できる基盤が整備された。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

人文学研究科は、フュージョンプログラム推進委員会を改称して、すでに23年4月より新たに「フュージョンプログラム運営委員会」を発足させている。今後は、この委員会が中心となり、本事業で開発された本プログラムを継続して運営していく。また、**プログラム実施期間中試行科目であった、「古典力基盤研究」と「古典力発展演習」の2科目を大学院共通科目として正式に設置し、すでに23年度に開講**している。

「フォーラム」に関しては古典ゼミナールを中心に学生から企画を募り、選抜して開催することでフォーラムの質を高めつつ、学生の自主性を養い、継続的に実施できるようにする。そのために必要な経費も研究科長裁量経費から支出するほか、実施期間中は、特命助教が行っていた、「古典ゼミナール」、「フォーラム」、「コロキウム」、「古典サロン」などのコーディネートを人文学研究科助教が担当する。また、大学本部からの財政的支援を得て、助教を支えるRAを配置した。このRAについてはプログラム実施中に積極的に活動した大学院生から選出している。

さらに本事業を行ってきた若手研究者室を再整備し、本プログラム推進の基盤となった、海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクトなどの共同研究組織や現在進行中の「若手研究者等海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」などを実施するスペースとして引き続き使用する。

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファルスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

本プログラムの内容をまとめたパンフレットを初年度に作成し、学内外に広く発信した。本教育プログラムの内容、経過、成果等はポスターや公式ホームページ(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/fusion/>)により随時公表してきた。ホームページには研究会の開催情報だけにとどまらず、開催した研究会の報告や、各古典ゼミナールでの研究内容報告を掲載してきた。特に研究会の開催情報や報告者募集に関しては人文学研究科の学生のほとんどの学生が自主的に参加している「**メーリングリスト**」でも発信している。さらに**22年度からは「研究員ブログ」を開設**し、研究員の日常や研究におけるアドバイスなどについて学内外の学生とコミュニケーションをとりながら、本プログラムの活動報告を発信してきた。**その活動は現在では facebook において引き継がれている**。こうした広報媒体を通してだけでなく、本プログラムは活動内容それ自身の中で社会と接点を持つように計画されており、特に「フォーラム」や「古典サロン」においてはそのことを特に意識しながら内容を検討してきた。特に「古典サロン」では市民にも興味を持ちやすいテーマを設定することで、本プログラムに参加しやすい工夫を凝らした。

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

本事業の開発した人文学分野の大学院教育のプログラムは、現代にふさわしい人文学の素養を身につける大学院共通科目と「古典ゼミナール」、「フォーラム」など、大学院生の自主的研究および社会的かつ国際的な活動の場とを連動させることで、**学生自身が生み出すアウトカムを重視した文科系大学院の先駆的モデル**のひとつを作り出し、大きな影響をもつものと思われる。

本プログラムの実施により、「古典力」及び「対話力」を兼ね備えた人文学の研究者が養成されるこ

とになる。つまり、若手研究者が、問題を原理論的に考察し、学域横断的に人文学の共通課題を理解する基盤的素養と社会的現実を切実に知り、他の学域や社会と意思疎通できる高度な学術的能力を培う教育システムが作られた。特に、この間に東アジアの協定大学群との連携を発展させて、大学院生と教員とが同じ場で議論しあう方法を構築したが、この方法はそれらの大学にも影響を与えた。これは、大規模とは言えない本研究科が、我が国を代表する人文学分野の大学院のひとつとして、これまで挙げてきた教育研究の成果をさらに伸長させる方向性となる。

また、本プログラムの実施期間中には標準修業年限内での博士号取得者が増加したばかりでなく、人文学分野の新課題に取り組む、意欲的で質的にも高い博士論文が提出された。そうした業績をあげた者の中から大学教員の職を得た者も少なくない。このような人文学分野の特色ある大学院教育のプログラムは、大学院生がユニークな問題を俎上にあげて取り組み、また、自らのイニシアティブで内外の研究者とのネットワークを構築し、国際的に活躍できる研究者へと育つ、ひとつの実践例を提供する。

さらに、取り組み実施の中で大学院生の中に多様な発信能力のスキルへのニーズが存在することが確認された。本プログラムでは授業の発表レジュメの作成から学術誌の論文作成、内外の学会での学術的発表のスキルに至るまでの指導を様々な企画を通して行った。そうした企画には、人文学研究科以外の大学院生の参加も見られた。この点で本プログラムが開発した方法の中には、人文学以外の分野の大学院学生のニーズにも呼応するものがあると考えられる。

最後に、教育の実質化について言えば、すでに述べたように、本プログラムでは、大学院共通科目においては、「古典力基盤研究」のような講義科目にあっても大学院生が特定質問者としての役割を担い、「古典力発展演習」では発表と評価を繰り返し、到達度を確認しながら、公開発表会や内外の学会発表へと連動させることで大学院生のアウトカムを充実させた。そして古典ゼミのような自発的かつ学域横断的な読書会から、外部の研究者を招聘したコロキウムやフォーラムの開催まで、大学院生自身が企画運営をした。さらにその成果の上に、「古典力基盤研究」で人文学の新しい課題を取り上げるといふ、理想的な循環を生み出した。以上のような方法は、**大学院生が授業時間以外に多くの研究を行うことを自然に促す点で、大学院における人文学教育として、波及効果がある**と思われる。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

神戸大学教育憲章は、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性的人材を養成するために、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開することを唱っている。これらの目標は、人文学分野の大学院教育にとどまらず、社会科学、自然科学、生命・人間科学の各学系における大学院教育にも高度な仕方でその実現が求められるものである。本事業の成果を元に、人文学研究科「フュージョンプログラム運営委員会」を中心に事業を継続すること、及び本事業をさらに発展させ、上の目標を実現できる高度な人文学教育に役立てるといふ今後の課題は、神戸大学の基本的な教育方針にも適っている。

また、神戸大学の第2期中期目標においては、「**既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけではなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う、優れた若手研究者を養成・輩出する**」ことが掲げられており、「人間性」、「創造性」、「国際性」、「専門性」それぞれについて、「国際的教育研究拠点としてふさわしい質の高い教育成果の達成」が目指されている。本事業は、人文学分野においてこのような高い目標を実現することに貢献するものである。したがって、本研究科が本事業を継続し、発展させようとする諸課題は、神戸大学の今後の進むべき方向と合致している。中期計画では、この課題の達成過程を恒常的に評価点検し、継続的な改善、内容の充実を図る予定である。

このような観点から、すでに述べたように、プログラム実施期間中試行科目であった、「古典力基盤研究」と「古典力発展演習」の2科目を大学院共通科目として正式に設置して今後も継続するほか、大学全体として、RAの配置など財政面も含め、本事業継続にあたってできる限りの支援を行う。

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<input checked="" type="checkbox"/> A 目的は十分に達成された <input type="checkbox"/> B 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> C 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> D 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>「古典力と対話力を核とし共通科目を段階的に実施することで現代の社会的ニーズに応える知識と技能を身につけた学生を養成する」という教育プログラムの目的に沿って、古典ゼミナール、古典サロン、コロキウム等の多彩なカリキュラムが着実に実施され、取組を実施する前の課題であった、原点に立ち返り原理的に考察する能力と学域を横断して人文学の共通課題を理解する基盤的素養を身につけることはある程度達成されている。学生の学会発表や論文執筆は活発になされ、大学院の質の向上に大きく貢献している。多様な教育プログラムを運営するために特命助教と教員によるワーキングを設置して、留意事項への対応もとられている。</p> <p>社会への情報提供については、プログラム概要、古典ゼミ等について詳細にわたる説明がホームページ上で積極的に公開され、facebook 等も利用し多様な方法で広く社会へ公表されている。</p> <p>支援期間終了後の大学による自主的・恒常的な展開については、古典力に関わる2科目を共通科目としたことは本プログラムによる成果の1つとして評価できる。また若手研究者室を再整備し、海外派遣事業を実施するスペースとして引き続き使用する点も評価できる。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>多彩なカリキュラムにより従来のコースワーク以外の大学院教育の可能性を提示できたことは高く評価でき、大学院生の自主的活動の活性化につながっている。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>支援期間終了後の自主的・恒常的な展開については、大学からの財政的支援などをさらに検討することが望まれる。また古典作品を教育に利用することで、より体系的で創意に富んだものにするのが求められる。</p>